

人生100年時代 生涯現役で働く

連載

第3回

ここは、長野県の山のなかにある「縄文おやき村」。
笑顔のすてきな80歳の女性が、今日もおやきをまるめています。



おやき製造・販売員
おおくぼはるみ
大久保晴美さん

笑って苦勞を乗り越える

取材・文：つじゆみこ
つじゆみこ
さめしまじゅんこ
写真：鮫島純子

人は流した涙の数だけやさしくなれるという。今回出会った生涯現役で働く人は、そんな言葉がびったりのやさしい笑顔を持つ八十歳の女性だった。

長野駅から車で三十分。くねくねした山道をのぼった先に、突然、縄文時代の竪穴式住居を模した建物が見えてくる。ここ「縄文おやき村」では、本格的な囲炉裏を囲んで、信州名物のおやきを味わえたり、おやきづくりを体験できたりする。

おやきとは、小麦粉でつくった薄皮に、野菜やなす、あずきなどの具材を包んで焼き上げる信州の素朴な食べ物である。

ここでおやきをつくっているのが、今年八十歳になる大久保晴美さんだ。

「いらっしや〜い」と、チャーミングな笑顔とともにあらわれた大久保さんは、とても八十歳には見えない若々しさだ。

「さあ、食べて、食べて」と焼きたてのおやきをすすめる姿は、絵に描いたような田舎のおばあちゃんそのものである。しかし、その笑顔の下には、言葉が失ってしまうほどの壮絶な半生があった。

ずっとお金の工面に追われていた

大久保さんは一九四二年、四人きょうだいの次女として生まれた。

「家は貧しかったですね。小学校に上がる前には、朝五時に起きて、妹の世話をしていました。山で野良仕事をしている両親におやきを焼いて届けるのも私の仕事。だから、私のおやき歴は七十五年！」

そう笑う大久保さんの家は農家だった。山の斜面一面に麻を植えたり、野菜や麦をつくったり。両親は日の出とともに畑に入



「週5日、ここに来て、みんなとおしゃべりするのが今の一番の楽しみです」

うな大きな出血のあとがあった。
「今から考えると、手術が失敗したんでしょうね。でも、私には医学の知識はありません。病院になにか文句を言うなんて、とてもできませんでした」
そのとき子どもは、まだ生後六カ月。大久保さんは突然、赤子と二人で生きていかなければならなくなった。実家は貧しくて頼りにならず、亡き夫の婚家も姑しゅうとめと折り合

いがよくなく、ほとんど絶縁状態だった。
「それからは地獄でした」とポツリ。幼子を抱えた状態では外に働きにいけないので、山のように内職を引き受けた。
そんな大久保さんに追い打ちをかけるように、心ない噂うわさがたつようになった。
「郵便局員の男性が家に長居をしていたとか、あることないこと言われてね」
大久保さんの瞳がみるみる潤んでくるのは、今思い出しても悔しさ、情けなさが消えないからだろう。たった一人、歯をくいしばり、わが子のために孤軍奮闘する毎日、どんなにつらかったらうか。
泣き続けた大久保さんに新しい出会いがあったのは、二十九歳のときだった。
「トラック運転手をしている男性と知り合って結婚したんです。相手は三歳年下の二十六歳で、初婚でした。もちろん噂が立

り、日没まで農作業に追われていた。
大久保さんも両親を手伝い、朝のひと仕事を終えたあと小学校に通っていた。通学には、なんと片道一時間半もかかった。
「学校に着くころには、くたびれはてて眠くて、眠くて……」

それでも懸命に授業を受けた。働きづめの両親に楽をさせてやりたかったからだ。大久保さんは、やさしい孝行娘だった。

「小学校では、いい思い出はなかったです。ほかの子のお弁当は白米。でも私は、白米二割、麦八割の黒いご飯。恥ずかしくて、手でかくして食べていました」

栄養が足りていなかったせいか、体も小さかった。ストーブ用の薪まきを運ぶのに、同級生は三本持てるが、大久保さんは二本持つのがやっとだった。

「学校から帰っても、農作業や内職の手

伝いをしたり。家で勉強する時間は、とてもなかったです」

中学校にあがると、がんばって勉強してもついていけなくなった。中学校を卒業したあとは、地元の製糸会社に就職した。

「でも母が、早く結婚しろ、生活が楽になるぞ、と言って。今思えば、口減らしだったのかもね。二十歳のとき、人の紹介で林業をしている男性と結婚しました」

なかなかの男前だったという夫。結婚した翌年には長男が生まれ、貧しいながらも幸せな結婚生活を送っていた。しかし、そんな生活は突然終わってしまう。

「夫が胃の手術をすることになったんです。朝、元気に家を出ていったのに、夜中の二時に病院から電話があつて。亡くなつたと言うから、もうびっくりして」

遺体を家に運ぶと、背中に水たまりのよ



縄文おやき村では、薄皮にカリッと焦げ目がついた焼きたてのおやきを、その場で味わえる

六十三歳まで勤めた。
四人の子どもたちは、みんな立派に成長し、独立していった。母の苦勞を見て育ったので、どの子も親思いのやさしい人間に

ちました。私が誘惑したとかね。でも、私たちが幸せならそれでいい。もうまわりの噂は気にしないことにしたんです」

その相手が今の夫だ。夫は大久保さんの連れ子の長男をかわいがってくれ、そのあと夫婦は三人の女の子にもめぐまれた。

ようやくつかんだ幸せに思えたが、夫には借金があった。トラックの運転手だったため、フリーランスとして仕事を受けていたため、自前でトラックを用意する必要があったのだ。借金は、その購入費だった。

「それ以外にも、ガソリン代やらタイヤ代やら修理代やら、なにかとお金がかかるんです。盆と正月には借金を押し返してきました。すべての借金を返し終わったのは、今から五年前。三十代から七十代後半まで、私の人生のほとんどは、お金の工面に追われていたようなものです」

借金を返すため、大久保さんは四人の子育てをしながら内職をして無我夢中で働いた。そして、子育てが一段落した四十三歳のとき、鉄鋼会社に就職する。

「私が苦勞してきたのを知っている人が就職の世話をしてくれたんです。内職ではなく、やっとお給料がもらえる仕事につけて、少し生活が楽になりました」

お金で苦勞してきただけに、安定した職につけたことがうれしくて、大久保さんはだれよりもがんばって働いた。その働きぶりが認められ、五年後にはチームのリーダーに抜擢された。「大久保さんが来てくれて、本当によかった」と言われたときは、天にもものほる心地だったという。

その会社には五十八歳まで勤めたが、事業所が移転し、通勤できなくなったのを機に退職。今度は、地元の味噌工場に定年の

育ったそうだ。子どもに関しては、うれしいこともあったという。

「次女が着物のコンテストで上信越地方の代表になって、全国大会に進んだんです。お金がないので、保険を解約して高い着物をつくりました。残念ながら全国大会では優勝できませんでしたけどね」

味噌工場をやめたあとは、内職などをしてお金を稼いだ。まだ借金が残っていたし、小さなときから働くことがあたりまえだった大久保さんには、休んでのんびりするという発想はなかったのだろう。

六十六歳のとき、働き者の大久保さんに声がかかった。近くの村でおやきの店がオープンすることになり、人手が必要になったのだ。小さなころからおやきを焼いていた大久保さんに、ぴったりの仕事だった。

出店したのは、長野県の小川村に本部を

置く第三セクターの「株式会社小川の庄」である。代表取締役の権田公隆（ごんたこうりゅう）さんは、おやき事業のいきさつについてこう語る。

「小川村には産業らしい産業がなく、畑仕事ができなくなった年配の方は、なにもすることがないと言っていました。高齢者にも生きがいをもって働いてもらうために、村おこしの一環として特産品を生かす事業を立ち上げました」

だから、この会社には定年がない。元気に働けるうちは何歳になっても働いていい。高齢者が働く前提で始まった事業だったからこそ、大久保さんも働きやすかった。そのあと、七十二歳で、今の縄文おやき村に異動し、現在、週五日、大久保さんはそこに通う。山道を車でのぼって店まで送り迎えしてくれるのは、今はトラックの運転手を引退した夫である。

ともあります。そのとき、落ちこまないように笑わせるんです。私も笑って前を向いて、ここまで生きてきましたから」

最年長の大久保さんの明るい人柄によって、店に心地のいい空気が流れている。

十七時に店をしめ、片づけをして、夫の迎えを待つのが日課だ。今は借金を返し終わり、おだやかな毎日が過ぎていく。

最後に、生涯現役で働く秘訣（ひけつ）を大久保さんに聞いてみた。

「何事にもよくよくよしないことです。心配したって解決しない。泣きたいときは外に出て、お日さまに向かって、一人で大声を出したらいいんです。そしたら、お日さまが黙って受けとめてくれます」

そうやって大久保さんは、たくさんの悲しみ、苦しみを乗りこえてきたのだろう。アメリカの詩人・ホイットマンの作品に

お日さまに向かって、大声を出す

大久保さんの朝は早い。七時四十分には店に着き、店の入り口のお地藏さまにご挨拶。そのあと、料理の仕込みや、おやきづくりを始める。小麦粉をこねて、のぼして、たっぷりの具材を入れてまるめる。多い日には、一日二百個以上つくるそうだ。

「二個売るといくらのもうけになるか計算しながらつくっているんです（笑）。はげみになりますよ。おいしかったからまた来たよ、なんて言ってくれるお客さんがいるとやりがいを感じるね」

この店で一緒に働く仲間は七人。一番若い二十六歳の社員と五十八歳の社員をのぞけば、残り五人は全員七十歳以上だ。

「若い子は経験が浅いので、失敗するこ

こんな一節がある。

「寒さにふるえた者ほど太陽のあたたかさを感じる。人生の悩みをくぐった者ほど生命の尊さを知る」

大久保さんの笑顔がお日さまのようにあたたかいのは、きっとこれまで、たくさん寒さにふるえて、たくさん人生の悩みをくぐってきたからに違いない。

人は流した涙の数だけやさしくなれるというのは本当だった。

大久保晴美さんに学ぶ

生涯現役で働くヒント

- ① 一生懸命に働いていると、声をかけてくれる人がいる
- ② 何事にもよくよくよせず、笑って前を向いて生きる

